

はじめに

学長 松田幸子

このたび幼児教育学科では『見つめる』と題した本を出版することになった。これは本学の教員各位の研究が実を結んだことであり、まことに喜ばしく関係各位のご努力に敬意を表する次第である。

さて本の表題である『見つめる』であるが、目を持っている動物はつねに何かを見つめて生きているように思われる。たいていの場合、それは自分の生命を維持するために獲物をねらって見つめていることが多いようだし、また敵から身を守るために周囲を見つめていることもあるであろう。

しかしながらホモ・サピエンス (Homo sapiens・賢い人) たる私たち人間は、単に普通の動物のような見つめ方をしてはならない。古代ギリシアの弁論・修辞学者のイソクラテス (Isocrates. 前 426 ~ 338) は、人と動物との最大の差異について「人は言葉と文字を持っている」ことをあげて修辞学の重要性を指摘している (廣川洋一『イソクラテスの修辞学校—西欧的教養の源泉—』講談社学術文庫)。したがって私たちは見つめているだけでなく、言葉と文字を使って人間特有の新しい文化を創造し、人類の幸福に寄与しなければならないのである。

ここでは人が何をどのように見つめ、何を生み出してきたかということをし眺めてみたいと思う。

ギリシアの哲学者プラトン (Platon. 前 427 ~ 347) は、自分の創った学校アカデメイアの入り口に「幾何学を解さない者は入ることを許さない」と書いた板を下げていたという伝説がある。これは幾何学が図形を見つめて図形を抽象化し、そこに潜む真理を導き出す学問だからである。おそらくプラトンは、物事を抽象化できないような人は学問をする資格がないと言いたかったのであろう。

そこでユークリッド (Euclid. 前 300 年頃) の『原論』 (池田美恵訳・世界の名著・9 巻・ギリシアの科学・中央公論社) をひもといてみると、最

初の定義のところに次のように書かれている。

「1. 点とは部分をもたないものである。

2. 線とは幅のない長さである。 以下略」

つまり点とは位置だけあって大きさのないものである。しかし私たちが紙に点を書くとかならず大きさがある。それを見つめて位置だけあって大きさのない点だと抽象化するのが幾何学である。鉛筆で線を引けば、かならず幅ができる。それを見つめて幅がない線だと思ふことのできない人は、幾何学がわかっていないのである。

このような抽象化をすることによって、ユークリッドは幾何学を創りあげたのである。古代ギリシアにあつては、幾何学が学問の王者であつた。

この幾何学重視の考えは、中世ヨーロッパの大学に受けつがれ、幾何学はラテン語の文法、論理学、修辞学、算術、天文学、音楽とともに自由七学科として全ての学生が履修させられたのである。また次に述べるニュートン (I. Newton.1643 ~ 1727) にも、幾何学重視の思想は大きく影響しているように思われる。

ニュートンには、林檎の落ちるのを見つめていて万有引力の法則を発見したというよく知られている伝説がある。それはともかく、彼が太陽や月、星空を見つめていたことは事実であろう。なぜなら彼は天体の動きをふくめ、すべての巨視的な物体の運動を記述するニュートン力学を完成させているからである。

ニュートン力学というと、私たちは難解な数式の羅列を想像するが、彼の著書『自然哲学の数学的諸原理』(河辺六男訳・世界の名著・26巻・ニュートン・中央公論社)を開いて見ると、数式がまったくないのである。文章と幾何学的な図形だけでニュートン力学を説明しているのである。先に幾何学がニュートンに大きな影響を与えたように思われると書いたが、これは彼の著書を眺めた私の第一印象であつた。

ニュートンに大きな影響を受けたのがドイツの哲学者カント (I. Kant.1724 ~ 1804) である。『カント全集』(高坂正顕・金子武蔵監修・原佑編集・理想社)を見ればわかることであるが、カントはかなりの数の自

然科学、それも天体や地球、力学などに関する論文を書いている。

カントは64歳になった時に、人倫の基本となるべき「道徳法則」を確立した『実践理性批判』（1788年・全集7巻・深作守文訳）を発表した。このなかで彼は、星の動きのように「道徳法則」にも不変の法則がなければならぬと、その結語で述べている。あまりにも有名なその言葉をここに引用する。

「二つの事物があつて、……いよいよ新たな、そして増大してゆく感嘆と畏敬の念をもって心を満たすのである。すなわちわが頭上なる星繁き天空とわが内なる道徳的法則とである。この二つを私は暗黒の中に、あるいは空想的なものの中に包み隠されたものとして、私の視界の外に探し求めたり、またただ憶測したりする必要はない。私はこれら両者を私の前に見、これらを直接自分の現存の意識と結びつけているのである。」

古代ギリシアのユークリッドや近世ヨーロッパのニュートン、カントといった人々の見つめたもの、そして彼らが生みだしてきた偉大なものについて述べてきた。しかし「見つめる」ことの重要性はこれ以外の所にも存在する。それは彼らの書いた著書を直接読むことによって、はるかな昔に生きていた人々を私たちは見つめることができるということ、そして彼らの偉大な業績に触れそれをさらに発展させることができるということである。これこそが言葉と文字を持っている私たちホモ・サピエンスの「見つめる」ことの喜びであり特権である。